

【ねがいましては】

平成28年2月25日

KYOWA SCHOOL

第304号

「こころをつなご」

ある日のテレビ番組で、自殺未遂をする女性を取り上げていました。鬱病にかかり、処方された薬を数十錠一気に飲み、気がもうろうとしている状態で病院に運ばれたそうです。数日後、回復した女性に病院側が実家へ戻るよう促すと、女性はそれを拒否、仕方なくそれまで勤めていた飲食店の店長さんに迎えに来るよう頼むと、快諾してくれた。

普通であれば、親元へ戻ることが自然なのだと思いますが、その女性は幼少の時から親の虐待にあっており、親に対し良い思い出が残っておらず、未だにその思い出がよみがえり精神的に不安定になってしまうとのこと。

どこにも信用できる人などいない。ひとり……。この寂しさが彼女を自殺願望へと導いてしまう現実。

親と子の間にあるべきもの……。『信頼』。その糸がブツツと切れてしまった瞬間、子の心には大きな恐怖が宿るようになります。冷たい雨の中、体を震わせながらうずくまっている子猫のような状態になります。子猫は寂しさのあまり、声を上げます。「ニャー、ニャー。」しかし、人の子はそれをも許されません。声を上げようものなら即座に虐待が待っています。行き場所を失ってしまった子。

虐待の場合は、目に見える跡が残るので発見がしやすいのかもしれませんが、しかし、日々続く親の期待から生まれる発言は傷を心に残すものの、傍目にはわからないことが多いと思います。

「今度成績が下がったら、今まで続けていたことをやめさせるぞ。」「今度成績が下がったら、お小遣いは中止だぞ。」いくらでも脅迫は見つかります。脅すことで、何が何でも勉強をさせようとする魂胆なのはわかりますが、子の心は逃げ場を失ったネズミのように、じっとうずくまるしか方法がありません。

仕方なく向かう机……。勉強をしたとしても、成績が下がったあとのことが想像されて仕方ありません。ただ目を運ぶだけの勉強。何も頭には残りません。「どうしよう、どうしよう、どうしよう。」

1位がいれば、必ず最下位がいます。では1位は最高に幸せで、最下位は不幸のどん底なののでしょうか。

思い出されるのが、『絵本』(KYOWA HOMEPAGE)、かっちゃんというカタツムリの主人公がいます。カタツムリは足が遅いので運動会では必ずビリ、でもその家庭はとても幸せそうです。家族が皆、助け合わないと十分な生活ができないからです。誰もが皆やるのが遅いからです。お母さんがかっちゃんへ言います。「かっちゃん、あなたはカタツムリの子なのよ、あなたはあなたらしく生きなさい。」温かい想いが、かっちゃんへと注がれます。

1位をとっている子は、お母さんから「1位がとれたとって安心はしないこと、あなたのお父さんは最後まで1位をとり続けたのよ。」これ脅迫の一種、「だから、次回1位から転落しようものなら容赦しないわよ。」と言っているようなものです。1位を取った子は気が気ではありません。

かっちゃんの家では、成績の「せ」の字も普段の生活の中で出ることはありません。毎日がとても和やかで明るい家庭です。1位をとった子の家庭では、いつもピリピリとした空気が漂っています。家族の会話はほとんどありません。

家族の中に『成績』をどこまで存在させるのか……。されど『成績』と、お考えの保護者の方が多いのではないのでしょうか。

世の中が豊かになりすぎてしまったが故の現象ではないのでしょうか。人は欲の塊。欲を持つことは悪いことではないにしろ、学校の中に『成績』がある以上、子への期待(欲)は、持つのが当たり前なのかもしれませんが、それ以前に健康であることへの感謝がどこかへ吹き飛び、日々当たり前のように食事に向かえることへの感謝も吹き飛び、一つ屋根の下で就寝につけることへの感謝も吹き飛び、何よりもまして、家族という出会いを奇跡的に向かえることができたことへの感謝も吹き飛んでしまっているような気がいたします。

たわいのない「おはよう」から始まり、「お休みなさい」と言って1日が終わることへの幸せをかみしめることが必要なのかもしれません。

はじめにご紹介した女性は21才だそうです。高校中退で東京へ、職を転々とし、孤独の極致へ達し自殺未遂。薬を大量にのみ、搬送されるのはほとんどが女性だそうです。

G7(先進7ヶ国)の中でも、若者の自殺率が最も高いのは日本、アメリカの2倍だそうです。専門家の弁では、『若年層の精神的な弱さが目立っています。他国のように、ストレスの対処法を教育で教わっていないからではないのでしょうか。中高年の自殺率は今後も下がっていくと思われませんが、若年層は増加傾向にあります。また、この数値(自殺率)には自殺未遂者が含まれていません。自損事故として救急搬送されるケースは女性に多いのですが、若年層は未遂も含めると相当の数になると思われます。』とのこと。

ストレスの対処法とありますが、失敗や挫折は悪いことだという先入観を幼少時から抱き続ける子どもたちにとって成績が落ちたということは犯罪のように感じてしまうのでしょうか。(ちがうよ)

間違えるのは当たり前、順位をつけてやらせようとするのは、大人たちの考えたこと。わからないから、間違えてしまうから、学ぼうとして日々学校へ通っているのです。

今の君が生き生きしていれば、それが100点。みんな、自分歩きをしようね。ありがとう。